

平成 29 年 11 月 29 日(水)

熊本県指定重要文化財洋学校教師館 ジェーンズ邸 解体部材調査報告・資料

(公財) 文化財建造物保存技術協会

■建物の建立と移築・修理経過

本建物は3度の移築を経ているが、使用工具・釘の違いにより各時期の改造・取替材が判別できた。小屋組から軸部までの横架材は、ほぼ当初材を使用しているが柱・1階床組・造作材・建具などには移築時の取替材が見られる。

明治 4(1871)年 熊本城内に洋学校教師館として建設

使用工具…大鋸・手鋸、和釘

明治27(1894)年 集議所洋館として移築 (※移築報告書では明治 19 年)

使用工具……大鋸・手鋸、和釘

主な改造・修理：内部床リノリウム (和釘で止める)

昭和 7(1932)年 日赤支部内に解体移築

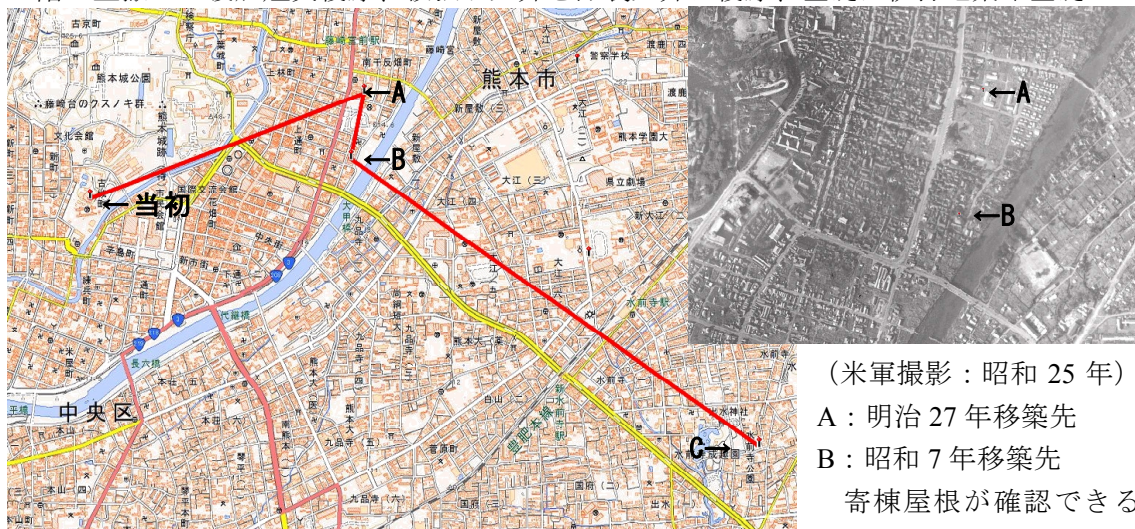
使用工具……丸鋸・手鋸、洋釘

主な改造・修理：一部柱取替、左右部屋の中央間仕切の撤去一室とする。正面起破風玄関新設、正面1階垂壁新設、暖炉煙突撤去、漆喰天井を板張天井にした

昭和45(1970)年 現在地に移築復原

使用工具……帯鋸、電動鉋、洋釘

主な改造・修理：日赤支部移築時の改造箇所を復原、間仕切の復原、正面玄関庇・正面1階垂壁撤去・暖炉煙突復原、板張り天井を漆喰天井に復原、基礎は杭打地業布基礎



■移築・修理による、当初部材の残存状況

- ・土台・1f床組：昭和45年移築時にすべて取替、当初の土台を大引・床束に転用(図①)
- ・柱1F2F：主要部分に当初材が残存する、昭和7・45年の取替材も多い(図②)
- ・2F床組：ほぼすべて当初材であるが、根太間に補強に根太材を補加している(図③)
- ・梁組：すべて当初材である(図④)
- ・小屋・母屋：すべて当初材である(図⑤)
- ・造作材窓・建具枠：取替材も見られるが良く残っている。カーテンロッド類、建具や建具金物も当初のものが多数残存している。
- ・壁・天井下地材：木摺材・壁材等はすべて取り替えられている。

■震災被害による再用可能材

- ・土台・1f床組：地震による影響より湿気等による経年の腐朽が激しく再用は不可能、ただし当初材は復原資料として保存(図①)
- ・柱1F2F：折損、接合部の仕口折れ等すべての材でなんらかの補修と補強が必要。
60%近くは取替・添木補強などで補修再用(図②)
- ・2F床組：折損、接合部の仕口折れ、70%近くは補修再用可能とみられる(図③)
- ・梁組：折損、接合部の仕口折れ、80%近くは補修再用可能とみられる(図④)
- ・小屋・母屋：すべて当初材である、80%近くは補修再用可能とみられる(図⑤)
- ・造作材窓・建具枠：破損が顕著で、目に付く化粧材なので補修・再用ともに難しい
昭和材も多く当初材で40～50%程度。
- ・壁・天井下地材：木摺材・壁材等はすべて取り替えられている。

■震災被災状況と建物の評価

●2016/4/14予震

- ・倒壊には至らなかったが、壁崩落・軸部が破損・かろうじて建っている状態
この地震で耐震性能(壁・軸部)が大きく損なわれた。

●2016/4/16本震

- ・建物全壊、倒壊
- ・屋根・小屋が左側(北西方向・震源地と真逆?)に振れて倒れ込んだ。主要軸部の折損などの破壊は、屋根瓦・小屋組の荷重によるものと思われる。なお基壇の不陸や孕み出し、ボルトで緊結された土台の破損は確認出来ない(基礎は杭打地業のうえ布基礎)。

■構造補強(文化財で良く使われる工法例)

- ・鉄筋コンクリート布基礎
- ・鉄骨補強(部屋の隅の見え隠れ目立たない要所)
- ・壁内構造用合板・筋違・火打
- ・添柱・添木補強(当初材を極力再用するため)(図⑥)